



ムラの知恵を掘り起こし、
未来の世界へつなげよう

ムラのミライ 活動レポート&ニュース

2017年2月号(2017年5月 Updated)

Report 1 猪鹿庁×ムラのミライで農村集落の獣害最前線を解体!

原 康子 ムラのミライ 認定トレーナー

Report 2 きれいごとは抜き! ホンネで取り組むコミュニティ開発研修

前川 香子 ムラのミライ 事務局次長/海外事業チーフ

Report 3 実践⇒研修⇒実践のサイクルが「夢中になれる」研修をつくりだす

中田 豊一 ムラのミライ 代表理事

Data ムラのミライ コンサルタント派遣実績

News 1 ネパール 家をキレイに、川をキレイに お買い物でゴミ減量

News 2 セネガル 自分たちの資源に自信を持つ それを活かす能力に自信を持つ

News 3 沖縄 シマのミライを考える コミュニティファシリテーター育成研修

News 4 イラン 援助ではなく協力を 住民参加型持続的地下水資源管理プロジェクト

Trainings メタファシリテーションにふれる・学ぶ・使いこなす ムラのミライの講座・研修

Publications 地域づくりで使えるコミュニケーションスキルの理論と事例 本で読む ムラのミライ

認定 NPO 法人ムラのミライ

高山事務所 〒506-0032 岐阜県高山市千島町 900-1 飛騨・世界生活文化センター内

電話 0577-33-4097 Fax 0577-34-5671

関西事務所 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町 2-22 早川総合ビル 3F

電話/ Fax 0798-31-7940

E-mail info@muranomirai.org ウェブサイト <http://muranomirai.org/>



Report 1

メタファシリテーション フィールドワーク研修@岐阜県郡上市（2016年11月）

猪鹿庁×ムラのミライで農村集落の獣害最前線を解体！

～本当に必要な支援とは？対話型ファシリテーションで地域の未来を創造しよう～

原 康子 ムラのミライ 認定トレーナー

この研修の発端は、研修参加者の1人で、この研修の仕掛け人でもある興膳健太さんの物語から始まる。以下は、その興膳さんが語る物語である。



のどかな田園風景が広がる岐阜県の山あいの集落。この辺りは、お定まりの過疎高齢化が進み、それに加えて獣害にも悩んでいる。興膳健太さんが所属するNPO法人「メタセコイアの森の仲間たち」¹は、そのような集落の支援を行うため、猪鹿庁を立ち上げた。そして何ができるかを話し合うために、役場を通じて紹介された住民に集まってもらった。まず、興膳さんが村人に尋ねる。

興膳「この集落で一番困っている問題は何ですか？」

リーダー的な存在の中年男性が答える。

村人「獣害がひどくて田畑を荒らされることだよ」

興膳「被害をもたらす獣種は何ですか？」

村人「猪や鹿、サルにハクビシン・・・何でも出るよ」

興膳「どのくらいの頻度で出ますか？」

村人「とにかく多いよ。いつも見るね」

¹ [NPO法人メタセコイアの森の仲間たち](#)（本部：郡上市大和町）の事業のうち、里山保全・獣害対策を扱う部署を「猪鹿庁」といいます。

興膳「なぜ、そんなに出るようになったんですか？」
村人「山に食べ物がないか、田畑の美味しいものの味をしめたんじゃろう」
興膳「何か対策はしてますか？」
村人「それぞれで電気柵とかやってるかな。でもあいつら賢いんだよ」
興膳「この集落に猟師さんはいますか？」
村人「最近、2人ほど罠の免許とったのがいるよ」
興膳「捕獲はできてますか？」
村人「あんまりできてないな」
興膳「どうしてですか？」
村人「2人も忙しくてね、捕獲は初心者だし、檻を買うお金もないしね」
興膳「今なら役場の補助金があるので、檻買いませんか？あれば便利ですよ？」
村人「はい。それはありがたい」
興膳「捕獲する技術もお伝えします。設置は集落でできますか？」
村人「もちろん」
興膳「設置後、餌やりや見回りも自分たちでやれますね？それが約束できれば支援します」
村人「約束するよ、できれば隣の集落のように集落柵も張りたいんじゃが」
興膳「わかりました。同じく労働力を集落から出していただければ資材は支援します」
村人「ありがとう。すごく助かるわい」

興膳さんたちは、役場にこれらの経緯を話し、補助金を使って、この集落へ捕獲檻と集落柵の資材を提供した。また、檻の設置指導と捕獲技術の講習も行った。こうして、集落では捕獲が始まり、集落柵によって防護体制も整った。興膳さんたちは、これで自立的な集落ぐるみのモデル的な取り組みを支援することができたという達成感で満たされていた。

半年後、集落では捕獲も進み、田畑の被害が減っているという報告を受けた。

それから、2年ほど経ったある日、たまたまその集落を通った役場職員から耳を疑うような話を聞かされた。捕獲檻は、草ぼうぼうの茂みの中で放置され、今はどうみても使っていないようだとのことだった。

興膳さんたちは、数日後集落を訪ねた。やはり職員の話は本当だった。捕獲檻は、茂みの中で扉も落ちた状態で放置されていた。また、集落柵も所々壊れていて、破られてそのままになっている箇所があった。興膳さんたちが来たことを聞きつけた集落の人たちが集まってきた。そして、中年のリーダーが言った。「捕獲檻ではぜんぜん獲れんので、くくり罠を支援してほしいのだが」

興膳さんは何と答えていいのかわからなかった。内心では、「自分たちで捕獲檻を活かそうとせず、次は新しいくくり罠代を支援してくれとは、なんて主体性に欠けるのだ。こんなことでは自立はおぼつかない・・・」という思いがこみ上げてきたが口には出せなかった。

「あれれ？この話、どこかで聞いたことがあるぞ」と思われた方もいらっしゃるかもしれませんね。そうです。「途上国の人々との話し方～国際協力メタファシリテーションの手法」²の序章にある「井戸掘り」のエピソードです。安全な飲料水が獣害、井戸が柵・檻に変わっただけで、話しの組み立ては、まさに同じ。この「獣害」エピソードは、2009年より興膳さんが岐阜県³を中心に獣害対策に携わり、実際に経験したり、聞いたりした話がもとになっています。

このように、心の中にモヤモヤを抱えつつ地域のために走り回っていた興膳さんが出会ったのが、メタファシリテーション（対話型ファシリテーション）。2016年の春、彼はムラのミライのメタファシリテーション1日基礎講座に参加しました。そして思ったのですね。「この技術は獣害対策にも有効だ、郡上市でぜひフィールド研修を実現したい」と。



興膳さんの仕掛けたフィールド研修という罫に自らかかっていったのが、フィールド大好きの前述の本の著者和田信明。「猪鍋⁴も出すよ」という餌につられたのが、ムラのミライ認定トレーナーの原康子でした。そして、研修参加者も、鳥獣害対策に関心のある会社員、途上国での駐在経験や青年海外協力隊経験者、政府機関職員、団体職員、NPO職員、銀行員、大学院生など多彩な人たちが集まり、いよいよ研修開始となりました。

研修初日、和田は「獣害はいったん忘れましょう」と言いました。「獣害というから、参加したのに」という方もおられたでしょう。まずメタファシリテーションの基本である「参照点⁵に注意しながら観察すること」「出会った地元の方に事実質問で話を聴くこと」を集落を歩いて2日間練習し、そして最後にこうして得た情報をもとに「獣害を‘過去と現在の母袋集落’という文脈に落とし込む」という研修でした。

² 和田信明・中田豊一著「途上国の人々との話し方～国際協力メタファシリテーションの手法」みずのわ出版 2010年

³ 岐阜県の平成27年度農作物鳥獣被害額、約3億4千万円（対前年比78%）。

参照：[岐阜県の鳥獣害対策](#)（岐阜県農村振興課）

⁴ 興膳さんが仕留め、解体したというイノシシ鍋は絶品でした。郡上は日本三大猪の産地（兵庫県丹波・静岡県南伊豆・岐阜県郡上）で、2017年1月20日には郡上市で第1回日本猪祭り（利き猪）が開催されました。

⁵ 「参照点」とはたとえば、集落にある水、土、森といった自然資源、古い石碑や河川工事、田の拡張や道路などです。38世帯からなる母袋集落は、鶺鴒で有名な長良川の支流にあたる栗巣川沿いの渓谷にあります。インタビューをした方の中には、25代目という方もおられた古くからあり、過去数十年のことはもちろん、200年以上前のこともご存じの方がおられました。

集落歩きを始める前、和田は参加者にこう伝えました。

「そこにずっと住んでいる人たちが気づかないことに（他所から来た人は）気づかないといけません。‘知っていることしか知らない’というのが地元の人です。10年、20年の変化は、渦中に生きている人（暮らしている人）は特に意識しません」



集落を歩き、森の民（木地師⁶）の話、冬の炭焼き、農耕と輸送用の馬、養蚕、植林（杉・檜）、ブナの木や梨の花と農作業の開始時期、都市部の人との交流イベント、退職後移住してきた方の暮らし等を事実質問で聞いていった参加者たちですが、なかなか事実質問だけで対話を続けてゆくことは難しい様子です。

最終日の講義。和田は、参加者が集めてきた情報の解説をしました。

獣は、自然資源を介在して人と接触します。母袋集落の人々がこれまでどのように水、土、森を使ってきたのか、使う以外の試みはあったのか、まず知る必要があります。過去をひとつずつ明らかにしていく作業・文脈に落と

してゆくという過程を通じて、‘獣害’という現象を明らかにしていきます。

今回は、地元の人たちと共有する時間はありませんでしたが、事実質問で一つ一つ明らかにしてゆく過程を他所から来た人と地元の人が共有していくなかで、母袋集落の特有のパターン（絵）が浮かびあがってきます。「これからの母袋集落」はその後です。

興膳さんは、研修最終日、固定概念を持たないように事実を聞くことの大切さに気づくと同時に「25代目で終わる瞬間（跡継ぎがない）」に立ち会っているという認識を深め、‘自分にできるアクションを起こし続けていきたい’と決意を新たにしました。また別の参加者は「獣害が問題だ」と言われた際、まず問題を認識するために、細かく空間的・時間的な要素（過去）に分解して、1つずつ事実を聞いていくことが大事だと理解できたと言っていました。

狩猟というのは、効率的に獲物を追跡誘導するための集団行動を要し、高度な認知能力とコミュニケーションが必須です。猟師の興膳さんが「メタファシリテーション」に狙いを定めたのは、必然だったのかもしれませんが。さて今後、猟師の間で、メタファシリテーションが大ブームになる日はくるでしょうか。

⁶ 木地師：ろくろを用いて椀や盆等の木工品を加工、製造する職人。明治中期までは美濃を中心に全国各地で木地師達が良質な材木を求めて20～30年単位で山中を移動していたと言われます。インタビューをした25代目の当主の方は、母袋集落で暮らしていた最後の木地師の方の名字をご存じでした。

3日間の流れ

1日目(午後)

◆集落を歩く方法(座学)

- 1) 観察スイッチを入れる瞬間
- 2) 参照点を見つける
- 3) 獣害を忘れて集落を見る方法
- 4) 母袋地区リーダーのお話

◆フィールドワーク

3つのグループで集落を歩く 1



2日目(午前)

◆グループワーク

- 1) 「分かったこと」のリストアップ
- 2) 「1日目の観察では分からなかったが、次回知らなければいけないこと」リストアップ

◆各グループ発表と「コンテキスト」に関する座学(和田)

(午後)

◆フィールドワーク 3つのグループで集落を歩く 2

(夜)

◆母袋集落の皆さんとの猪鍋交流会

3日目(午前)

◆フィールドワークまとめ

- 1) 獣害を1つの文脈のなかに落とし込む方法
- 2) 次のステップ(方向性)をみつめるまでの事実質問
- 3) 質疑応答



Report 2

「紛争解決と共生社会づくりのための実践的参加型コミュニティ開発手法」研修(2016年11~12月)

きれいごとは抜き！ ホンネで取り組むコミュニティ開発研修

前川 香子 ムラのミライ 事務局次長/海外事業チーフ/関西事務所

「紛争解決と共生社会づくりのための実践的参加型コミュニティ開発手法」研修とは

JICAの平和構築分野支援における、途上国（特に紛争影響国）の行政・NGO職員を対象とした、日本への研修員受入事業の一つ（JICA関西と関西NGO協議会の協働事業）。1998年からこの研修に携わってきた中田豊一から引継いで、2016年からは前川香子をメインファシリテーターとして派遣。メタファシリテーション手法による研修を6週間に渡って実施しました。

1. コミュニティ開発？なんだソレ

6週間の研修の終盤で、ある男性参加者が言いました。その人は、中東のNGO 管轄庁に所属し、3000以上の自国NGOの財務報告書を処理する監査の役職についています。

「私の上司は、日本に出発する前、こう言って送り出してくれました。『日本を楽しんで来いよ。コミュニティ開発？何だソレ。会計関係の俺たちにはあまり関係なさそうだけど、まあ良い機会だ。日本を楽しめ』実際、私もそう思っていました。そしてこの研修が始まって、他の参加者の活動内容を聞いている間、彼らと自分の業種は全然違っているな、というのが最初の感想でした。



「だけど、日が経ち、メタファシリテーション技術を学ぶにつれて、自分の担当任務でもNGOを通してコミュニティ開発に携われる、しなければと思うようになったのです。上司にも時々研修内容を共有していましたが、上司自身がそれに気づいて、帰国後に何をどう進めていくかというアクション・プランづくりの相談にも乗ってくれたのです」

そして彼は、そのための NGO モニタリングと評価のための指標作りから取り組む、というアクション・プランを作成しました。

では、研修に参加していたその人自身のみならず、図らずも彼の上司さえも意識を変えてしまった研修コースは、どのように進められたのでしょうか？

2. 聞いているだけでは学べない

そもそも「紛争解決」と銘打っているものの、現在の日本には武器を使用した紛争はなく、また、紛争解決の方法そのものを知っている人は、世界中で誰一人としていないでしょう。紛争中あるいは紛争後での地域づくりのためには、そうでない状況よりも、かつての敵と味方、地元民と避難民、多種多様な民族等々、立場や背景が異なる人々の間での意見の相違も認め合い、寛容性を持つことがより求められます。

そして、「憶測や感情ではなく事実を把握し、相手の本音を引き出し、その地域の課題を見極めて、対応策に取り組んでいく」ことが必要になります。

しかしながら、言うは易し行うは難し。そこで、研修初日にはこの研修コースの基本姿勢として、パウロ・フレイレ（参加型開発の祖とされるブラジルの教育者）の言葉を紹介しました。

「人々は誰しも豊かな経験と知識を持っている。しかしながら、経験からは学べない。経験を分析することで、学ぶことができる」

そして、研修員たちは、それぞれの国や活動地域、活動内容について発表することから、研修は始まりました。この経験の共有には、4日間かけました。

研修員たち全員が、英語を堪能に操れるわけではありません。私自身、南インド英語独特の言い回しや発音でしゃべります。この共有時間は、そういう環境での「意見を発言し合い、聞き合う」という研修スタイルを作り出すためでもありました。



3. 手柄話だけじゃつまらない

経験の共有でも、そこから派生した様々な議論でも、研修員たちは成功例だけでなく、直面している「悩み」などについても話します。

例えば、若年層の就労支援をしている研修員による「せっかく大学を卒業しても、それに見合う職業に就けず、教育と就職のミスマッチが起きている」という話だったり、コミュニティの再建に関わっている研修員の「男性たちが居る場所では、女性たちは喋らない」という話だったり。他の研修員たちは「あるある」とうなずき、「意識を変えないといけない」と口々に言います。

私自身、10年前にはじめて駐在員として渡印し、農村に行ったときの事を、研修員たちと共有しました。

「私は無意識の内に『問題』を探していました。3時間半ほどの移動中も寝ないようにして、車の窓から見える田んぼやため池、老若男女の村人たちに家々など、『何か問題がある、困っていることがある』という目で観察し、話をしていたのです。なぜならば、『村に何も問題がなく、誰も助けを必要としないのなら、NGOは何のために誰のために働いてお金をもらっているの?』と思っていたからです。けれど、その時、私には問題を見つけることができなかった。『問題がある』と思い込んでいた上に、それを『見つける』方法を知りませんでした」

そして、私自身が見聞きした「何かの事業で造った後に放置されている建物」や「数年前に保健衛生向上のために建設されたトイレは、今は農具保管小屋として役に立っている」ことなどを話すと、他の研修員たちも苦笑しつつ、強く同意しました。「私の国にもあるよ。けれどそれは、最初で何かにつまずいてしまった、ということだったんだよね」

「Reaching Out to Field Reality」の中の「NGO ワーカーの井戸建設のハナシ」も例示に使いながら、躓いた「何か」について議論を重ねました。そして、研修員たちからも問題提起された「思い込みを解く」「意識を変化させる」必要があるのは、住民たちだけではなく、私たち自身でもあるのだ、ということに研修員たちは気付いていきます。

4. 多彩多様な講師たち

ずっと室内ばかりではつまらない、外に出て活動現場を見てみよう、と、大阪市西成区の釜ヶ崎（あいりん地区）、広島県広島市・三次市、宮城県東松島市・南三陸町の三つの地域にも行きました。NPOや公共施設、農家などを訪問して、様々な活動方法を知り、ワークショップ手法を体験し、住民たちの経験を聞くためです。また、中東やアフリカなどの紛争地域で活動を行っている日本のNGOや企業、大学関係者から話を聞き、議論を交わしました。



そうした視察研修の合間に、前述したメタファシリテーションの技術やコミュニティ開発についての考え方を、共有していったのです。

終盤では、メタファシリテーションの大御所である和田信明さんにも急きょ登場してもらい、「で、コミュニティって一体ナニ?」「その『コミュニティ』では詰まるところ、何を基盤とするのだろうか?」ということ、数億年前の地球や人類の歴史まで遡り、現代の和田さんの経験談も挟みながら、研修員たちに問うていきました。

研修コースのタイトルに「紛争解決」ともあるので、そのための「これだ」というスキルも学ぶことを、期待していた研修員もいたことは否めません。しかしながら、冒頭にも記しているように、そして視察研修中でも彼らが聞いたように、「紛争解決のための特効薬はない」し、どういう状況においても、コミュニティ開発に取り組むためには、必要なファシリテーション技術を、その場に応じて駆使するしかないのです。研修中も同様に、その場に応じて、室内の研修内容は作られました。それが、池住義憲さん、中田豊一さんによって15年以上続いてきたこの研修の大枠であり、基本姿勢であり、そして私自身もそこに重点を置いて臨んだのでした。私にとって、改めて、池住さん・中田さん両者の凄さが身に染みた、6週間でした。

5. 研修員たちが気付いたこと

最後に、研修員たちからのコメントをいくつかご紹介します。

・ブルンジ（行政職員）「若年層をエンパワーし、他の住民たちと共に地域づくりを進めていけば、暴力や紛争にも歯止めがかかるかもしれないと思った。ファシリテーションスキルやジェンダー主流化は非常に示唆的な内容で、自国でのコミュニティ開発事業にもこの技法を取り入れ、従事するスタッフたちのスキルを向上させていきたい」

・フィリピン（行政職員）「コミュニティの代わりに考えるのではなく、コミュニティ自らが考え、気づけるような支援を実行していきたい。事業の中で使うモニタリング・評価指標の設定にも住民を巻き込むというのは、とても斬新な方法の発見だった。」

・ウガンダ（行政職員）「認識ではなく事実を聞く事実質問を使えば、問題を突き詰めることができるし、地域住民のニーズと思いを理解（共感）するための知識があれば、対立を避け、事業を協働していくことができる、と思えるようになった」

・ザンビア（行政職員）「自分自身のやり方、相手への問いかけ方が間違っていた、ということに気付く事ができた。女性たちのための活動が長続きしなかったのは、彼女たちのために、自分たちが活動を作り出していたからだった。事実質問の方法や、南三陸への視察研修で知った、女性たち自身が活動を選択できる機会が作り出されていることなどを活かして、帰国後には今までと違うことができると思う。」

・南スーダン（NGO 職員）「自国では、復讐に次ぐ復讐、暴力の連鎖が続いているので、許しや和解の価値など無いようなもの。だけど日本では、憲法でも謳われているように、戦争を放棄し、広島視察研修で語ってくれた坪井氏は、もうかつての敵に対しての憎しみは無いと語るなど、平和文化が築かれているのを実感した。私は団体内の事業すべてを統括する立場にあるので、まずは職員たちに事実質問などファシリテーション技術を共有し、使えるように研修も考えていきたい。」



Report 3

NPO 法人 AMDA 社会開発機構へのアドバイザー派遣@ミャンマー（2016年1月、8月）

実践⇒研修⇒実践のサイクルが「夢中になれる」研修をつくりだす

中田 豊一 ムラのミライ 代表理事

国際協力 NGO、AMDA 社会開発機構からの依頼で、2016年の1月と8月、ミャンマーのマグウェ地域パウツ地区での地域保健プロジェクトのスタッフたちを対象に、メタファシリテーション手法の研修を実施しました。それぞれ5日間、参加者は現地スタッフと駐在員の合計25人ほどでした。

結果として、とても充実した研修になりました。最大の要因は、第1回で教えた事実質問の技法や村への関わり方などを、参加者の多くが現場で実践してくれていたため、第2回目はその反省と発見の上に立って実施できたことです。「実践⇒研修⇒実践」というサイクルを繰り返せたので、効果はテキメンでした。私自身が現場で村人相手に手法を使って見せたのも、大きな刺激になったようです。



パウツのプロジェクト担当の松尾さんからは、一回目の後、以下のコメントをいただきました。

第1回の研修では、事実質問の生まれた背景と事実質問の手法、新規事業立案にあたるアセスメントでの事実質問の応用、プロジェクトのデザインについて講義いただきました。

その後、現行事業の研修の導入部や村人との会議の場、新規事業の立案にあたっての質問票などに、事実質問を活用しています。例えば・・・全村の委員や郡行政局幹部を招いて開いた年次会議で、委員の一人より「事業で作ったトイレから悪臭がして、村人が使いたくないと言う」との発言がありました。以前だったら、スタッフの技師が技術的な面から考えられる問題や対策を述べるにとどまったのではと思われそうですが、今回はそれにとどまらず、スタッフは「同じ問題に直面したことがある委員はいますか。どう対応したか共有してくれませんか」と呼びかけました。5村の委員がそれに応じ、自身の経験を熱心に話してくれました。

そして、2回目は、以下のような研修をしてほしいということになりました。

1) 住民が主体的に活動できるようにするファシリテーションの在り方。

スタッフのファシリテーターとしてあるべき心構えと姿勢

2) 住民を主体とする事業（建設を含む事業）の進め方



この要請に従って第2回を組み立てたところ、より実践的で高度なものになりました。松尾さんからは、次のようなコメントをいただきました。

前回ご指導いただいた事実質問をベースに、でも、一步次の段階に進んだ研修内容は前回にも増して面白く、夢中になってお話を聞いていました。これからの一つ一つの活動に対して事業全体の流れも意識しながら、そして村人の反応にも柔軟に対応することを心掛けながら、一步一步（復習を大事に）進んでいこうと思います。

私自身にも新たな学びがあり、関係者の皆さんに心から感謝しています。



ムラのミライ コンサルタント派遣実績

2014年度（2014年4月から2015年3月）**専門家派遣 1件**

JICA 農村開発部「アフガニスタン・タジキスタン国境バダフシャーン地域における農村開発プロジェクト」

講師派遣 8件

日本ユースリーダー協会、滋賀県国際交流推進協議会、JICA 関西、ADRA Japan、林野庁等

アドバイザー派遣 2件

日本国際ボランティアセンター、神戸市 NPO アドバイザー派遣

2015年度（2015年4月から2016年3月）**専門家派遣 2件**

JICA 農村開発部「アフガニスタン国稲作振興支援プロジェクト」、JICA 農村開発部「ゴレスタン州住民参加型農業開発促進プロジェクト」

講師派遣 10件

アールディーアイ、和歌山国際交流協会、開発教育協会、浄土真宗高岡教区、日本国際連合協会東京本部、お茶の水女子大学グローバル協力センター、龍谷大学等

アドバイザー派遣 2件

AMDA 社会開発機構（ミャンマー）、ハンガーフリーワールド（日本）

オーダーメイド研修 2件

名古屋大学大学院「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラム、JICA「ウツタルプラデシュ住民参加型森林管理と貧困削減プロジェクト」

2016年度上半期（2016年4月から12月）**専門家派遣 1件**

JICA 農村開発部「アフガニスタン国稲作振興支援プロジェクト」

講師派遣 7件

オイコクレジット・ジャパン、ファンドレイジング協会北海道チャプター、兵庫県柔道整復師協会、関西大学、JICA 関西、大学コンソーシアム大阪、龍谷大学

アドバイザー派遣 2件

チャリティーサンタ（ネパール）、AMDA 社会開発機構（ミャンマー）

オーダーメイド研修 1件

COMMIT（インドネシア、ネパール）

家をキレイに、川をキレイに お買い物でゴミ減量

田中 十紀恵 ムラのミライ 海外事業・研修事業コーディネーター/ネパール事務所

「地域の女性グループのメンバーに、ゴミの減量や分別を広めていきたい！」
ムラのミライのトレーナー養成研修後にごう語ったのは、ダヤさん。

ネパールでは、トレーナー養成研修を受けた“エコレンジャー”たちが、他の地域住民へゴミ処理・分別研修を行っています。ダヤさんもその一人。

その活動の一環で、ゴミ減量のメッセージを載せた買い物バッグを作りました。玉ねぎ、にんじん、青菜・・・買い物をするたびに手元

が増えるプラスチック袋。こうした袋を少しでも減らそうと彼女たちが推進しているのが、買い物バッグの持参。研修参加者の多くは、エコレンジャーと同じ、日々家庭でのゴミ処理を担う女性たちです。そこで、「自分たちが使いたくなるバッグはどんなものか？」からバッグ作りをスタート。そして、トレーナー養成研修の時に楽しいイラスト付きの教材を作ったダヤさんが、イラストを描くことになりました。はじめは「私にできるかしら…」と不安な様子でしたが、すぐにみんなのアイデアをまとめた一枚のイラストを描いてきてくれました。



出来上がったサンプルを見て、「早くこのバッグを研修で参加者に見せたいわ～」と口々に言うエコレンジャーたち。ダヤさんもうれしそうに写真をとっていました。

エコレンジャー発の買い物バッグがカトマンズで見られる日も、そう遠くないかもしれません。

エコレンジャー育成研修はトヨタ自動車より「トヨタ環境活動助成プログラム」として支援を受け、現在実施中です

自分たちの資源に自信を持つ それを活かす能力に自信を持つ

和田 信明 ムラのミライ 専属コンサルタント

西アフリカ最西端の国セネガル、大西洋に近い村々で行うプロジェクトの核心のところにあるのは、村の青年たちに自信を持ってもらうということです。

自分たちの持てる資源に自信を持つ、それを活かす自分たちの能力に自信を持つ。でもそのためには、その自信の根拠となる知識と技術を身につけなくてはなりません。

自分たちの持てる資源についての知識、それを活かすための技術。限られた資源をいかに有効に使うか、土と水をどのように再生するか、資金をどう生み出していくか、儲けとは何か、コストとは何か、実践するに当たってどう計画を立てるのか、そもそも計画とは何か。

学ぶことは沢山あり、しかもそれを自分が使うことのできる技術にしていくためには、持続する意志と柔軟な思考力が求められます。ムラのミライがこれまで蓄積した経験と知識、そして方法論の全てをアフリカの大地に生きる青年たちに伝えるプロジェクトです。



セネガルでの新プロジェクト「地域資源の循環による農村コミュニティ生計向上プロジェクト～農村青年層のための『ファーマーズ・スクール』」は JICA 草の根技術協力事業（パートナー型・3年間）として 2017 年 2 月にスタートしました

シマのミライを考える コミュニティファシリテーター育成研修

宮下 和佳 ムラのミライ 専務理事/関西事務所

この春、日本国内で初めて、本格的なメタファシリテーション実践者を育てる研修を開始します！

ある地域/コミュニティに関わっていくところから、コミュニティによる課題分析→活動の形成・実施・・・というプロセスを実際に起こしていくことのできるファシリテーター。今までに、こうした人材を育成したのは、下記3パターンでした。

- ・ムラのミライのプロジェクト実施過程を通して、スタッフを育成
- ・インドネシアでの JICA 技術協力事業「市民社会の参加によるコミュニティ開発技術協力プロジェクト(2004年～2006年)」に専門家として参加し、現地の NGO や自治体スタッフ等を育成
- ・ムラのミライのメタファシリテーション基礎講座修了生やアドバイザー派遣先のスタッフに講師が個別のスーパーバイズを続け、様々な組織で活躍される方を育成

上記のインドネシアでのプロジェクトのように、日本国内でも複数年かけて「マスターファシリテーター」を育てる研修をやりたい！と願ってきたのですが、ようやく、その第一弾が実現することになったのがこの研修です。



研修の舞台となるのは、沖縄県名護市久志地区（名護市東海岸）。全国津々浦々から集まる研修生と、地元からの研修参加者（久志で地域づくりに携わっている方々）と、ムラのミライ講師陣が地域にお邪魔し、お話を伺うところからスタートします。開始後のレポートを楽しみにお待ちください。

本研修は JICA 「NGO 等提案型事業」として、2017 年 4 月の第 1 回研修を皮切りに約 1 年半かけて実施します

援助ではなく協力を 住民参加型持続的地下水資源管理プロジェクト

中田 豊一 ムラのミライ 代表理事

ムラのミライは今、「住民参加型持続的地下水資源統合管理プロジェクト」実施に向けて、イラン政府と最後の詰めを行っています。国家的危機である地下水資源の減少を、農民たちの主体的な努力によって食い止めるため、メタファシリテーション手法を使ってコミュニティファシリテーターを育成し、意識と行動を変えていくというのが柱です。和田が常駐して4州のモデル事業地を回りながら研修を行い、その補完として、中田が年間数か月間加わるという形で3年間実施する予定です。



中身はこれまでの延長線上にありますが、仕組みは画期的です。数年前から JICA の専門家として中田が実施してきた研修の成果に瞠目したイラン政府の高官たちが「今度は、自前の資金でやりたいから協力してくれ」と言って来たのが始まりで、すでに予算は承認されています。相手政府にソフトを買っていただけるとするのは、稀有な例で（寡聞にして他に知りません）、援助屋にとって最高の勲章であり、未だに半信半疑なくらいです。

「援助ではなく協力」を言葉だけで終わらせないために、総力を挙げて取り組むつもりです。



メタファシリテーションにふれる・学ぶ・使いこなす ムラのミライの講座・研修

メタファシリテーション入門セミナー

初めての方向け。2時間で、参加費1,000円。気軽にメタファシリテーションの概要にふれることができます。

名古屋 5月

日時 2017年5月31日（水）19時から21時

会場 なごや地球ひろば（名古屋市中村区）

西宮 6月 平日

日時 2017年6月19日（月）19時から21時

会場 ムラのミライ関西事務所（兵庫県西宮市）

西宮 6月 日曜

日時 2017年6月11日（日）13時から15時

会場 ムラのミライ関西事務所（兵庫県西宮市）

メタファシリテーション基礎講座

まる1日かけてじっくりとメタファシリテーションを学ぶ本格派・少人数制の講座です。

復習メールマガジンの配信や修了生限定研修・勉強会などフォローアップつき！

5月 西宮

日時 2017年5月29日（月）9時半から17時半

会場 ムラのミライ関西事務所（兵庫県西宮市）

6月 名古屋

日時 2017年6月10日（土）10時から18時

会場 JICA中部 なごや地球ひろば（名古屋市中村区）

5月 横浜

日時 2017年5月31日（水）9時半から17時半

会場 戸塚さくらプラザ（横浜市戸塚区）

6月 ネパール（カトマンズ）

日時 2017年6月20日（火）9時半から17時半

会場 SOMNEED Nepal（Boudha, Kathmandu）

6月 東京

日時 2017年6月2日（金）9時半から17時半

会場 コンテハウス（東京都豊島区駒込）

6月 スリランカ（コロンボ）

日時 2017年6月24日（土）9時半から17時半

会場 JICAスリランカ事務所

オーダーメイド

地元でメタファシリテーション研修を開催したい、自分の活動に合わせた内容の研修を受けたいというご要望に様々な形でお応えしています。HPの[問い合わせフォーム](#)や[メール](#)で、お気軽にお問い合わせください。

講座の共同開催 メタファシリテーション基礎講座や入門セミナーを地元で受講したい・開催したいという方
会場手配や参加者募集などの運営面をムラのミライと分担して頂くことで、一定の無料参加枠をご提供します。

講師・コンサルタント派遣 活動や目的に応じた研修を組み立ててほしい・調査等に同行してほしいという方
ご要望に合わせて、ムラのミライのコンサルタントを派遣いたします。

オンライン・コーチング 個別のアドバイスを求めている個人・団体の方

Skypeを使って事例検討をおこない、講師からアドバイスをいたします。

地域づくりで使えるコミュニケーションスキルの理論と実例

本で読む ムラのミライ

誰も語り得なかった 現代の正体とその「解」 NPO 実践から生まれたこの「解」とは？
地上戦を進めていった先に見えた答は、私たちそれぞれの生活のなかにあった・・・

ムラの未来・ヒトの未来 化石燃料文明の彼方へ

国際協力・コミュニティ開発に携わる人の必読書として定着。

途上国の人々との話し方 国際協力メタファシリテーションの手法

「途上国の人々との話し方」英訳版。

Reaching out to Field Reality

モノも配らない・インフラも作らない・やるのは研修だけ、しかも参加者の自腹!?
メタファシリテーション手法を育てた、空前絶後の ODA プロジェクトの記録。

PKPM ODA の新しい方法論はこれだ

最新作「ムラの未来・ヒトの未来」へと続く思考実験がされた 1 冊

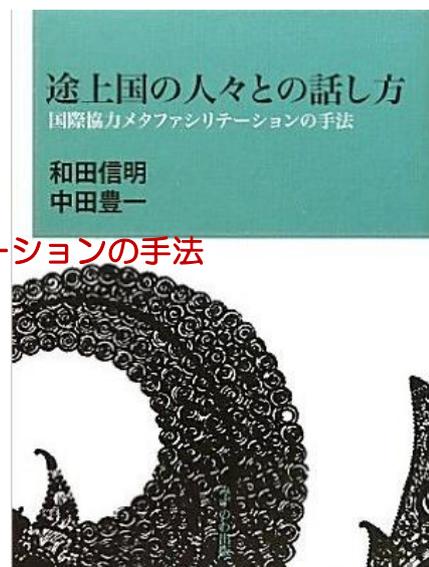
人間性未来論

マンガもついて、抜群の読みやすさ！
マイクロファイナンスに関心がある人にもおススメ

南国港町おばちゃん信金

日常生活など身近な事例中心の、手軽なブックレット。

対話型ファシリテーションの手ほどき



[購入先へのリンク](#)はムラのミライ HP へ/ムラのミライ主催研修では消費税抜きの特別価格で購入できます